

2. 次画面表示装置

松 川 正 樹

講座番組における講師の過度の緊張を和らげる演出上の工夫を試行するため、我々は第1部の考察に基づき、第2部第1章に揚げられた試み（実験）を行なった。私が担当したのは「次画面表示装置」と「講師自身によるVTRスタート」であるが、ここでは次画面表示装置に関する試みについて報告する。

a. 次画面表示装置の役割

テレビの放送番組では、進行の段取り（話の順番）を間違えずに進めることが出演者やディレクターにとって重要な課題である。予め書かれた台本の段取りに従って全スタッフが作業を進めていくからである。放送大学の講義番組においても出演講師の不安の一つは、段取りを間違えずに進めることが出来るかどうか（予定通りに素材のVTR・図表を挿入出来るか）ということではないだろうか。

今回実施した出演講師へのアンケート調査を見てみると、

「段取りを間違えずに進めることができるかの不安を感じた」講師・・・56.9%

であり、半分以上の出演講師が収録に際し段取り通りの進行に不安を抱いているのが解るし、収録後の反省点でも、

「台本のどの部分を話しているのわからなかった」・・・・・・・・・・ 6.8%

「図を見せるきっかけがつかめなかった」・・・・・・・・・・ 11.4%

という結果が出ており、収録を経験した講師の一部がその点を指摘している。

また、収録前・後の不安等を訊いた答え（自由記述）にも、

「講義の内容で順序を間違えた。」「次にどのパターンを説明するのか、迷うことがあった。」

「多くの図表を複数のカメラで撮って使用する場合、次にどれが出るのか分からなくなることもある。スタンバイしている画面を別モニターで確認できるとよい。」

などの記述が見られる。いずれにしろ、順番通りにビデオや図表を説明していくことが講師の不安要素の一つとなっており、収録時における緊張要因となっていると考えられる。

放送大学の講義番組では、通常1人の講師が自分の正面にあるカメラに正対し講義内容を話し続けることで講義（番組）が進行していく。テレビでの講義なので話の間にはビデオ映像やイラスト・図表（パターン又はフリップと呼ばれる）等が挿入され、慣れていない講師にとっては煩雑で過度の緊張を生み出す一因とも考えられる。それは話の順番と共に挿入すべき素材（インサート素材）の順番やタイミングも覚えておかなければならないからである。

通常の収録時には、講師は手元に置いた台本と目の前に置かれたモニター（ふつうカメラのすぐ前）を見ることにより話とインサート素材の順番を確認して行く。しかしモニターでは現在進行中の映像しか見ることができないため、次のインサート素材を忘れてしまうことも時々起きている。特に私が今年度（平成7年度）担当した『動物の社会と行動』のようにインサート素材の多い講義（番組）では出演講師の負担はより大きいといわなければならないだろう。

そこでこの研究プロジェクトで考え出されてテストすることになったのが、「次画面表示

装置」と呼ぶもう1台のモニターである。この次画面表示装置には現在進行中の場面の次の映像（パターンや素材ビデオの冒頭の映像）が出るようにしておく。この次画面のモニターを見ることにより出演講師が次の話題・インサート素材の順番を確認しやすくなり、また講師の負担・緊張感も軽減出来るのではと期待したわけである。

収録中の講師が確認可能なモニターを中心に一般的な講義番組の流れを考えてみると、

(順)	(項目)	(モニター画面・通常)
1	タイトル	タイトル映像
2	講師・主題紹介	講師
3	具体例紹介(1)	V(ビデオ映像) 1
4	〃 解説	講師
5	解説まとめ	P(図表) 1
6	次の話題	講師
7	具体例紹介(2)	V(ビデオ映像) 2
8	〃解説・まとめ	P(図表) 2
9

というようなことになるであろう。

この同じ講義番組を次画面表示装置をも用いた場合の講師が確認できるモニター画面を考えてみると、

(順)	(項目)	(モニター画面1・通常)	(次画面表示モニター画面2)
1	タイトル	タイトル映像	講師(またはV1)
2	講師・主題紹介	講師	V1
3	具体例紹介(1)	V(ビデオ映像) 1	講師(またはP1)
4	〃 解説	講師	P1
5	解説まとめ	P(図表) 1	講師(またはV2)
6	次の話題	講師	V2
7	具体例紹介(2)	V(ビデオ映像) 2	P2
8	〃解説・まとめ	P(図表) 2
9	

ということになる。

収録中の講師は、進行中の映像(モニター1)とともに次の場面となる映像(モニター2・次画面表示)をも確認できることになる。

以上のように講師が収録中に2つのモニター(進行中の映像、次画面映像)を確認できることから、次画面表示装置導入の効果としては、

講師が講義(番組)の順番・流れを把握し易い

そのために、講師の不安感や緊張を和らげる

講義そのものがなめらかに進行できる

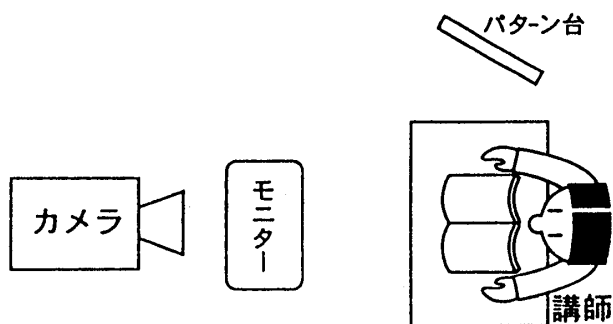
といったことが期待できるし、また問題点としては、

講師がモニターが2つ(進行中の映像、次画面映像)あるためかえって混乱しないか

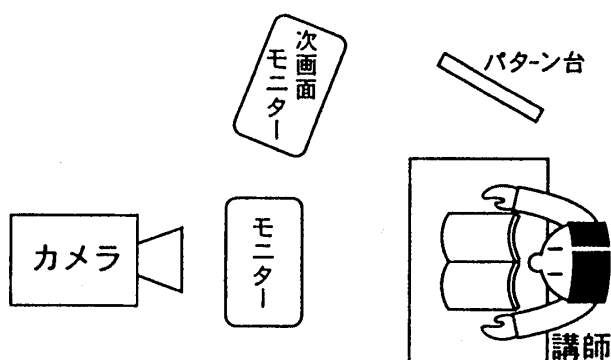
次画面のモニターの映像切り替え作業を行うスタッフ（実際にはディレクター）に影響を与えるのではないかと予測される。

ｂ．次画面表示装置の状況

次画面表示装置とはどんなものか、次に図及び写真で示しておこう。



図－１ 通常収録時



図－２ 次画面表示装置利用時



c. 実験（V T R収録）の実施

次画面表示装置を導入してのV T R収録は、次の日程により実施された。

	(科目)	(回)	(担当講師)
8月23日	母性の健康科学	10・11	I 講師・I 講師
10月2日	動物の行動と社会	5・6	S ヌ
10月24日	動物の行動と社会	12・13	N ヌ

(この回は、心拍数計測は実施せず)

1月31日	認知心理学	K ヌ・H ヌ
-------	-------	---------

この4回の収録日にはいずれも午前1回、午後1回の収録が行われ、原則として午後の収録時に次画面表示装置を導入してのV T R収録が行われた。(1月31日の認知心理学のみは例外的に午前の収録時に次画面表示装置を導入してのV T R収録が行われた。)

『母性の健康科学』・『動物の行動と社会』・『認知心理学』の3科目とも平成3年度制作の改訂版であり、6人の講師はいずれも収録経験者である。

d. 番組の進行状況

次画面表示装置を導入しての番組収録がどのように進行していったか、ここでは私自身が制作を担当した『動物の行動と社会』（第5回・第6回）を中心に番組の流れを見ていくことにしたい。

『動物の行動と社会』（主任講師：日高 敏隆 滋賀県立大学学長）は、動物の行動の生物学的研究をとりあげ、行動と社会とを関連させながらとらえ、動物の行動を明らかにすることを主眼とする。そのために講義（番組）中においては、行動のおこるしくみ・行動の発達・行動の進化等を実例に基づいて詳述しようというねらいがあり、番組中に挿入する映像素材（ビデオ映像・図表等）の数量が多いという特徴がある。

インサート素材が多いということは、aの項でふれたように出演講師やディレクターにとって順番通り進めることが収録中の重要課題であり、次画面表示装置を導入しての実験には適しているということがいえよう。

調査対象となったのは、第5回「行動の発達と学習(1)」・第6回「行動の発達と学習(2)」(担当講師：S 成城大学短期大学部助教授)で、第5回を次画面表示装置を導入しない通常の方法で収録し、第6回を次画面表示装置を導入してV T R収録を行った。

担当講師のS助教授は、4年前(平成3年度)にも第5回・第6回を担当しているが、今年度は初めてのスタジオ収録であった。なお、出演者は担当講師のみ1人である。

講義（番組）中のインサート素材の数は、

第5回	合計23	うちビデオ映像12	図表	10	C G 1
第6回	〃 23	〃	11	〃 12	であった。

次画面表示装置を導入しないで収録した第5回の番組のながれと次画面表示装置を導入して収録した第6回の番組のながれを示しておこう。

<<『動物の行動と社会』第5回・第6回「行動の発達と学習（１）（２）」より>>

『動物の行動と社会』第5回 行動の発達と学習（１）	『動物の行動と社会』第6回 行動の発達と学習（２）
1. タイトル 45"	1. タイトル 45"
2. はじめに 1' 50" 2' 35"	2. はじめに 25" 1' 10"
3. 本能か学習か V 1・V 2 5' 35" 8' 10"	3. 刷り込み V 1～V 5 13' 35" P 1・P 2 14' 45"
4. 行動の個体発生 V 3～V 6 14' 35" P 1～P 4 22' 45"	4. さえずりの発達 V 6・V 7 13' 45" P 3～P 8 28' 30"
5. 成熟と学習 V 7 5' 30" P 5・P 6 28' 15"	5. 文化 V 8～V 11 13' 05" P 9～P 12 41' 35"
6. 学習 V 8～V 12 13' 15" P 7～P 10 41' 30" C G 1 41' 30"	6. まとめ 1' 22" 42' 57"
7. まとめ 1' 27" 42' 57"	
8. タイトル 1' 03" 44' 00"	7. タイトル 1' 03" 44' 00"

(注) V：ビデオ映像素材 P：図表

この表を見ても解るように、第5回・第6回とも構成要素はよく似ており、午後に収録した第6回に次画面表示装置を導入した他はスタジオ状況にも変わりはなく、進行状況も両回とも同じように比較的スムーズに推移した。

e. 実験の結果（講師の心拍数）

第2章に紹介されているように、収録中の講師の心拍数の変化についてはほとんどすべての収録時において、番組収録開始直前と番組終了直前に増加する。今回計測装置をつけて調査した各講師ともその変化は確認され、S講師の場合も例外ではなかった。

番組進行中の講師の心拍数の変化を、次画面表示装置導入との関連で見ると、

平均心拍数では、5名中3名の講師が、次画面表示装置があるときの方が、ないときよりも統計的に有意に低く、他の2名の講師の場合、統計的に有意な変化はみられない。

次画面表示装置の効果がはっきりとあらわれる可能性がある画面切り替え前後での心拍数については、

今回計測した5名の全講師について、次画面表示装置がある場合はない場合にくらべて有意に低くなっている。

したがって、第2章の仁科助教授の分析においても、

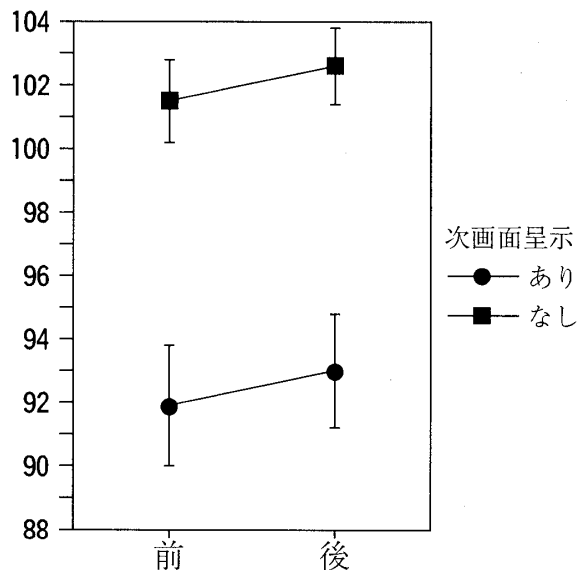
「次画面表示装置のあり・なしによる心拍数のちがいは、きわめて高い統計的信頼を有して、

講師の緊張をやわらげる上で効果をもっていると考えられる。」

としている。

S講師のデータもこの5名の中に含まれており、同様の結果がいえが、右に数値を示しておこう。

図-3 画面切り替え前後の心拍数(/分)



S講師は収録直後の感想で、「次画面表示装置があった方が、やりやすく安心して講義ができた。」「今後も次画面表示装置を導入しての収録をしてみたいし、他講師にも勧めたい」と述べており、今回の『動物の行動と社会』第5回・第6回での実験結果を見る限りでは、次画面表示装置導入が講師の不安及び緊張の緩和につながっていると見てよいだろう。

f. 実験結果の考察

前項で述べたように、今回の心拍数の実験では、次画面表示装置を導入した方が、導入しない場合よりも、講師の不安感や緊張をやわらげるという傾向が認められる。

といって、今回の実験結果からただちに、「次画面表示装置を導入した方が、導入しない場合よりも、講師の不安感や緊張をやわらげる」「それ故に、今後の収録作業には、次画面表示装置の導入を考えるべきである。」と考えてよいのだろうか。

講師の不安や緊張を生み出す最大の原因ともいえる番組の内容との関係、今回の実験調査に参加し収録を行った講師の方々の意見等を見ながら、この点を考察してみたい。

まず、番組（講義）の流れをやや詳しく見てみることにしよう。第5回・第6回ともビデオ映像素材・図表（パターン or フリップ）がともに番組に登場する場面までの流れを見てみると、

《第5回》 『行動の発達と学習（1）』

	(映 像)	(音声・解説)	(次画面表示・なし)
1. タイトル	V (タイトルバック)	T M	
2. はじめに	S 講師	あいさつ 行動の発達について	
3. 本能か学習か	S 講師 V 1 (カモ類) S 講師 V 2 (ハツカネズミ)	本能と学習 カモの求愛行動 々まとめ ネズミの学習について ネズミの迷路学習	
4. 行動の個体発生	S 講師 V 3 (鳩水飲み) S 講師 V 4 (オトシブミ) S 講師 V 5 (アシナガバチ) S 講師 P 1 (アカゲザル) S 講師	行動の個体発生 鳥の水飲み行動 本能と行動型 オトシブミの行動型 行動型の変化 アシナガバチの例	

(注) V：ビデオ映像素材

P：図表

《第6回》 『行動の発達と学習（2）』

	(映 像)	(音声・解説)	(次画面表示)
1. タイトル	V (タイトルバック)	T M	S 講師
2. はじめに	S 講師	あいさつ 行動と刷り込みについて	V 1
3. 刷り込み	S 講師 V 1 (カモの親子) S 講師 V 2 (ハイイロガン) S 講師 V 3 (おもちゃとヒナ) P 1 (マガモ実験図) P 2 (実験グラフ) S 講師 V 4 (馬親子)	刷り込み行動の例 カモの刷り込み 々まとめ ローレツとガン 親子の刷り込み 々の刷り込み例 マガモによる実験 実験結果 色々な実例 馬・牛等の例	S 講師 V 2 S 講師 V 3 P 1 P 2 S 講師 V 4 S 講師

(注) V：ビデオ映像素材

P：図表

という流れになるが、講師→V（ビデオ映像）・講師→P（図表）やV→講師・P→講師という画面切り替わり時の進行は、収録ビデオを見る限りいずれも大過なく推移しており、第5回と第6回とでは大きな差は見いだせない。

また、この点について、S講師は収録直後に「講義の流れについては、第6回のほうが思い通りに進んだと思うが、これは次画面表示装置のあるなしとは関係がないと思う。」と述べている。

S講師以外の感想記述でも、

「次画面表示装置の有無は、収録のやり易さや講義の進行しやすさとは、特に関係はない。次画面表示装置は、なくてもよいのではと感じた。」（I講師）

「講義内容としては、午後の（次画面表示装置あり）の方が満足のいくものだったが、次画面表示装置のあるなしとは関係がない。」（N講師）

「次画面表示装置の有無とは関係なく、午後（次画面表示装置なし）の方が順調だった。」（H講師）

「次画面表示装置のある方では、モニターの見間違えをしてしまった。次画面表示装置はなくていい。打ち合せと台本で十分。」「選択的注意が阻害される傾向があるので、次画面表示装置は必要ないと思う。」（K講師）

といった声があがっており、講義内容を伝える第一の主演である出演講師からは、次画面表示装置導入については、むしろ消極的な意見の方が強いように思われる。

また、各講師からは、次画面表示装置についての問題点も指摘されている。

「次画面表示は、見るタイミングが難しい。」

「意図せぬ図表と見誤るおそれがあり、次画面表示装置があったのでとまどった。」

「1回見間違えた。次画面まで注意が行き届かないとミスの原因となる。」（K講師）

「二つのモニターの識別ができず、何度かとまどいました。」（H講師）

というように、a項に挙げた我々の予想通りの結果が出てしまったといえよう。

この点については、前に掲げた写真で解るように二つのモニターが似通っていることも一因と思われ、もう少し準備期間・実験予算に余裕があれば通常モニターとはかなり異なるデザインのモニターを用意するなど改善が図れたとも思われるが、基本的には、収録中の講師が注意を向けるべきモニター数は増やすべきでない、と考えるべきであろう。

同様に、制作担当をした各ディレクターからも収録最中の次画面表示スイッチ操作はかなり負担になったとの報告もあり、この点においても予測された通り制作スタッフへの新たな負担を生じさせていることが解った。

以上のことから、次画面表示装置導入については、心拍数の変化という生理的側面からは、講師の緊張を緩和できるのではという期待を持つことはできるものの、K講師の指摘のように次画面表示装置導入が番組進行上のミスの原因となりうるというマイナス要素や、講師やスタッフの現実的な心理的負担を考え合わせると、日常的に収録作業に採用するのはまだまだ問題点も多く今後も十分な検討が必要であろう。